札幌保健科学雑誌　第８号　37－41（2019）

報　告

中国・佳木斯大学における国際医学交流事業活動報告

齊藤秀和

札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

2018年度の札幌医科大学国際医学交流事業の交流研究者として，中華人民共和国の佳木斯大学康復医学院および佳木斯大学附属第三医院にて，交流研究の機会を得た．佳木斯大学は1947年創立の黒竜江省，佳木斯市にある総合大学である．今回の交流研究では，佳木斯大学康復医学院における教育，研究および附属・関連施設における臨床についての情報交換と今後の発展に向けた議論を目的として訪問した．また交流研究の一環として，学部学生・大学院生に対する講義，および佳木斯大学附属第三医院におけるセラピストとの情報交換を経験した．本稿では，今回の佳木斯大学における国際医学交流事業の交流研究内容について報告した．また佳木斯大学附属第三医院におけるリハビリテーションの現況についても述べており，今後の佳木斯大学との交流研究の一助になればと考える．

キーワード：佳木斯大学，国際交流，リハビリテーション

International exchange programs at Jiamusi University in China

Hidekazu SAITO

Sapporo Medical University, School of Health Sciences, Department of Occupational Therapy,
First Division of Occupational Therapy

I had been studying at Jiamusi University and the Third Affiliated Hospital of Jiamusi University in China as an exchange researcher of international exchange programs of Sapporo Medical University from November 19th to 23th, 2018. This University was established in 1947 at Jiamusi city, Heilongjiang, China, and several colleges were federated into a university. In this exchange research, I visited Faculty of Rehabilitation Medicine in Jiamusi University for information exchange about education, research and rehabilitation techniques, and had some discussion aiming at further development of relationship in the future. In addition, I gave lectures about occupational therapy for stroke patients as a part of the exchange research, and discussed about rehabilitation with therapist in university hospital. In this report, I reported about exchange research, and rehabilitation in university hospital. I hope this report is useful for future inter-university exchange agreement.

Key words：Jiamusi University, International Conference, Rehabilitation

Sapporo J. Health Sci. 8：37-41(2019)

＜連絡先＞　齊藤秀和：〒060-8556　札幌市中央区南1条西17丁目　札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

1．はじめに

札幌医科大学国際医学交流事業において，札幌医科大学と中華人民共和国の佳木斯大学との学術交流協定（MOU: Memorandum of Understanding）に基づき，両大学は相互に研究者派遣および招聘を行ってきた．両大学は2008年より学術交流を継続しており，今年度で11年目となる．今回，2018年度札幌医科大学国際医学交流事業の交流研究者として，2018年11月19日から11月23日の日程で，佳木斯大学康復医学院（本学保健医療学部作業療法学科および理学療法学科に相当）および佳木斯大学附属第三医院における交流研究の機会を得た．今回の訪問で経験した教育・研究・臨床に関する交流研究内容について報告し，来年度以降の交流発展に向けて内容を検討する．

2．佳木斯市及び佳木斯大学の概要

佳木斯市は，中国黒竜江省北東部にあるロシア国境の都市であり，札幌市と直線距離で950kmと地理的にも近くに位置している．近郊には黒竜江（アムール川），烏蘇里江（ウスリー川），松花江が流れており，中国で最も早く日が昇る都市として知られている．2014年時点で，面積26,400㎢，人口242万人[1)]と札幌よりも巨大な市域，人口を誇る都市であり，黒竜江省の経済・文化の中心的な都市である．

佳木斯大学は，1947年に「合江軍区衛生幹部学校」が前身となり，その後佳木斯医学院，佳木斯工学院，佳木斯師範専科学校などが合併して，現在の形となった．大学の敷地面積は，131万㎡と非常に広大で，学部生22,367名，大学院生1,590名，留学生512名，教職員数4020名（2018年）を誇る総合大学であり，文学、工学、医学、経済、教育などの11分野，25学院，３カ所の附属病院を有している[2)]．附属医院には第一から第三医院があり，それぞれ急性期医療，口腔外科・歯科，およびリハビリテーションを専門とする病院に分かれている．

3．交流研究内容

1）目的

今回の国際医学交流事業における交流研究では，佳木斯大学康復医学院で行われている教育，および附属第三医院における治療・リハビリテーション場面を見学し，教育・臨床の現況について研修を行う事を目的とした．また，佳木斯大学康復医学院で行われている研究内容・方法や，使用されている研究機器を見学し，共同研究の可能性についても併せて検討した．

2）交流研究の概要

本交流研究は，表１のスケジュールで実施された．11月19日の午前は，佳木斯大学康復医学院内における各講義室・研究室の見学を行った．11月20日および11月22日の午前は，リハビリテーションに関する講義を佳木斯大学康復医学院の学部学生および大学院生に対して行った．また11月19日-11月22日の午後は，佳木斯大学附属第三医院において成人に対するリハビリテーションの見学および情報交換を行った．

3）佳木斯大学の見学および学院長との懇談

佳木斯大学は先にも述べた通り，敷地面積が広大であるため，今回は佳木斯大学康復医学院を含むリハビリテーション関連施設を中心に見学を行った．康復医学院の教育関連施設として，講義室，演習室および研究室・実験室があり，1フロアの中に集約されていた．講義室および演習室には，リハビリテーションに関する設備が一定数揃っており，この点においては本学と大きな差は無いと感じた．大学の附属病院である佳木斯大学附属第三医院が，中国で最初の小児専門病院であることもあり，特に小児リハビリテーションに関連するものが多く準備されていた．研究室・実験室には，ラットおよびマウス用のトレッドミルや迷路などの動物実験用の機器が多数整備されており，また遠心分離機やドラフトチャンバーなどの遺伝子学的および生理

表１．交流スケジュール

月日	交流研究内容
11月19日（月）	AM　佳木斯大学康復医学院の見学 PM　附属第三医院での情報交換
11月20日（火）	AM　学生への講義 PM　附属第三医院での情報交換
11月21日（水）	AM　国際交流事業に関する検討会議 PM　附属第三医院での情報交換
11月22日（木）	AM　学生への講義 PM　附属第三医院での情報交換
11月23日（金）	AM　大学施設見学（博物館，資料館など） PM　大学教員との交流会

写真１．学院長との懇談

写真２．講義風景

学的解析のための実験設備も整備されていた．一方で，経頭蓋磁気刺激装置が佳木斯大学附属第三医院にあるものの，佳木斯大学康復医学院にはヒトの非侵襲的記録に関する実験設備はあまり多く見られなかった．佳木斯大学は総合大学であるため様々な施設を有しており，上記以外の施設として，動植物標本を保管する博物館や大学の歴史資料館，少数民族に関する資料館を見学することができた．

学院長との懇談では，リハビリテーションに関連する佳木斯大学での教育状況について，お話を伺うことができた（写真１）．佳木斯大学康復医学院の１学年は60名と，札幌医科大学の作業療法学科・理学療法学科を合わせた人数の1.5倍であり，日本の養成校と同等の学生数であった．また作業療法士および理学療法士の養成課程が4年間であり，1年生から2年生で一般教養・専門基礎科目、3年生で専門科目を学び、4年生で臨床実習を行うという流れで教育が行われており，日本と類似したシステムが多数見られた．臨床実習は関連病院で実施しており，佳木斯大学附属第三医院を中心に臨床技術に関する指導を行っている．加えて外部講師として，佳木斯大学附属第三医院の作業療法士および理学療法士が佳木斯大学康復医学院に出入りしており，この点も本学と類似した教育システムとなっている事が明らかとなった．一方で，大学入学時点では，作業療法および理学療法の区分が無いという点は日本と異なっており，各病院就職後に各専門領域へ分かれる制度となっている．したがって養成課程においては，作業療法と理学療法という区分なく，リハビリテーションという大きな枠組みで教育を行っていた．

４）佳木斯大学康復医学院の学生に対する講義

今回の国際医学交流事業における派遣決定後，佳木斯大学康復医学院の担当教員と連絡を取る中で，脳卒中および頚髄症患者に対するリハビリテーションに関する内容での講義依頼を受けた．また現地で，「日本における自助具，補装具」についての講義依頼を受けたため，「最近の脳卒中リハビリテーションに関する知見」，「頚髄症リハビリテーションおよび自助具・補装具について」という２つの内容について，学部３年生を対象に講義を実施した（写真２）．１つ目の「最近の脳卒中リハビリテーションに関する知見」の講義では，急性期・回復期・維持期で必要な評価や訓練内容，各期での注意点について概要を説明した．また注意障害や失行などの事例を提示し，実際に行った方法を学生に紹介した．機能的電気刺激やロボットを用いたリハビリテーションなど，最近日本で広く使用され始めている新たな手法についても紹介し，学生は興味を持った様子であった．

２つ目の講義である「頚髄症リハビリテーションおよび自助具・補装具について」では，疾患の原因や特徴について概説し，画像所見や神経所見を見るための手技について説明した．まだ専門科目の講義が終了していない部分も多い学年であったため，実際の検査手技の演習も含めた形で講義を進めた．また自助具については，学生が見たことの無いものも複数提示することができ，使用方法や適応について質問があがった．両講義とも，講義後にリハビリテーションの具体的な方法について多くの質問があがるなど，佳木斯大学康復医学院の学生は非常に熱心に講義を聴講してくれた．

５）佳木斯大学附属第三医院の見学およびセラピストとの情報交換

佳木斯大学附属第三医院は，中国で最初の小児専門リハビリテーション病院として始まり，現在でも多くの発達障害を有する小児に対してリハビリテーションを行っている．また近年は，成人に対するリハビリテーションにも力を入れており，今回は成人リハビリテーション部門を中心に見学を行った（写真３）．またリハビリテーションを行っている患者への対応について，作業療法士を中心としたセラピストと情報交換を行った．佳木斯大学附属第三医院では，作業療法士，理学療法士，言語聴覚士の他に，日本で言う鍼灸師やあん摩マッサージ指圧師もおり，東洋医学も取り入れたリハビリテーションを展開していた．患者が有している疾患としては，脳卒中が大部分を占めており，その他に交通事故による高エネルギー外傷や腱損傷などの

写真３．佳木斯大学附属第三医院の成人リハビリテーション部門のスタッフ

写真４．佳木斯大学附属第三医院での情報交換

疾患を認めた．現地で主治医，看護師および作業療法士・理学療法士から患者情報の説明を聞き，リハビリテーションについてのディスカッション及び，必要に応じてアドバイスを行うという流れで情報交換を行った（写真４）．本来であれば，初期評価からの流れに基づいて検討すべきであるが，今回の研修では一人の患者に対応できる時間があまり多くなかったことから，最低限必要な内容に絞って説明を行った．患者情報を聴取する中で，使用している評価スケールに偏りや，CT・MRIを含む画像から情報を十分に取得できていない場面が散見された．画像評価については医師が確認するのみで，セラピストの確認が不十分であったため，リハビリテーション開始前に必ず確認するようアドバイスした．

患者のご家族の発言などから，「１度の介入によって，すぐに効果を出してほしい」といった考えをリハビリテーションに対して抱いているように感じた．しかし，リハビリテーションによる回復を得るためには時間を要するため，より良い回復のために時間が必要であることを説明し，理解が得られるよう努力していくことが重要であると考える．また，今回見学した疾患のように不可逆的なものについては，完全に元の身体機能に戻るのは難しい．従って，セラピストだけではなく，関係する医療スタッフ全員で一致した今後の方向性を持ち，患者本人・ご家族に対して障害への理解を促していく必要があると考える．文化的・社会的背景から，ご家族が病院内に宿泊・生活しながら，患者の介助を行う場面が多く見られた．入院中でもご家族が患者と接する機会が多いのであれば，ADL場面での介助方法や自主訓練方法の指導をご家族に対して行う事で，より効率的な機能回復が得られる可能性があると考える．しかし現状では，ご家族に対しての介助方法の説明が不十分であり，ADLでは過介助となっている部分が散見された．今後は，ご家族へのリハビリテーションについての説明，および介助方法の指導についても，日本の経験や知識を基にした支援の可能性について検討すべきであると考える．しかしこれには医療スタッフだけではなく，患者およびご家族の意識も変えていく必要があるため，長期的な関わりが必要であり，今後も本学の継続的な支援が必要であると考える．

６）佳木斯大学との今後の交流のあり方

上記のように佳木斯大学の教員，学生および佳木斯大学附属第三医院の医療スタッフと様々な交流の機会を頂いた．今回の交流研修を通じて，医療，特に今回見学したリハビリテーション分野について，我々が支援できる側面が多分に残されていると感じた．また佳木斯大学の学生，医療スタッフを含めて，我々の話に対して非常に熱心に耳を傾けていただき，少しでも技術・知識の向上につなげたいという意欲が強く感じられた．今後も日本ならびに札幌医科大学での医療やリハビリテーションについて，国際医学交流事業などを通じて，技術や知識を伝えていくことが重要であると考える．また継続的に交流を進めることで，本学が佳木斯大学だけではなく，中国全体のリハビリテーションの発展に貢献できるのではないかと考える．

研究については，日本と設備が異なる面が多分にあり，実験室・研究室レベルでの共同研究を早急に進めるのは難しい可能性が高い．一方で，症例検討を含めた臨床研究については，我々が可能な医療技術の支援も含め，共同で進めることができる部分が数多くあるのではないかと考える．

４．おわりに

2018年度の国際医学交流事業における，佳木斯大学での交流研究の概要について報告した．今回の訪問を通して，佳木斯大学の教員や医療スタッフだけではなく，学生からの話を伺うことができ，現地の教育・医療の状況を理解することができた．

今回の交流研究期間中，佳木斯大学大学院日本語学科の大学院生（陳庭園氏）に通訳をいただいた．特に佳木斯大学附属第三医院では，患者やご家族とコミュニケーション

を取る上で中国語への通訳が不可欠であり，滞りなく現地での交流研究を進める事できたことに深く感謝申し上げる．

本事業は，交流研究が主たる目的ではあるが，その内容には学生への教育や臨床技術支援に類したものも含まれていた．今後は，両大学の教員間における共同研究も含め，両大学間の関係がさらに発展できるよう検討し，交流を深めていくことが必要であると考える．また今回の交流研究が，今後の関係発展の一助となれば幸いである．

5．謝　　辞

今回の国際医学交流事業での交流研究という貴重な経験の機会を頂戴し，塚本泰司学長，大日向輝美学部長，国際医学交流事業ご担当の先生方および事務局の方々など学内の関係各位のみなさま，並びに現地でのコーディネートをいただいた譚麗萍先生，佳木斯大学の先生方と佳木斯大学附属第三医院のスタッフなど，現地の関係各位のみなさまに深く感謝申し上げます．

引 用 文 献

1）札幌市HP：http://www.city.sapporo.jp/somu/kokusai/wwcam/membercity_jiamusi.html
2）佳木斯大学HP：http://www.jmsu.org/xxgk/jdgk.htm